第12回登別市総合計画第3期基本計画市民検討委員会まちづくり部会議事録

◆ 開催日時　　平成２６年１２月１８日（木）　18：30～　20：00
◆ 開催場所　　図書閲覧室
◆ 出席部会員　　部会長　中原　義勝
　　副部会長　渡部　雅子
　　部会員　山田　正幸
　　田中　寛志
　　稲葉　一彦
　　沼田　久人（庁内検討委員会 副部会長）
　　【市総務部企画調整 G 総括主幹】
◆ 欠席部会員　　部会員　工藤　隆行
　　川島　雅司
　　松本　崇之
　　成田　育磨
　　堀井　貴之（市庁内検討委員会 部会長）
　　【総務部次長】
　事務局　　上野主幹、西川原主査、菊地主査
◆ 議題　　「第 6 章担いあうまちづくり」に関する考え方及び体系図について

⦿部会長
　先月で各項目が一区切り付きましたので、今までの話し合いについて一度振り返った中で、改めて意見があれば論議をすることになると思いますので、おさらいをしていきたいと思います。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　三月に立ち上げてから、幾度もご参集頂いて議論して頂きました。
　頂いた意見は議事録に載せて、その中から事務局で提言に載せるものを抜粋して資料を作って、皆さんと内容についてのご相談をしようと思っています。
　ただ、いきなりというのも難しいですので、今日はこれまでの中でもう一度話しておきたいことや部会が終わってから話しておけばよかったと思ったことがあれば話して頂きたいと思っています。
　まず、第三期基本計画を作っても、最初から人口が減るという前提で物事を行うのはいけない、人口を維持、増加していく思いが必要だという意見を頂きました。

それと、協働のまちづくりはある程度行政がコントロールしていかないとなかなか進まないのではないかという意見を頂きました。
今日は、いつも仰っている協働のまちづくりの関係でお話し頂いてもいいのかなと考えています。

⦿部会員
協働のまちづくりとは何かと言うと、もっと勉強しなさいという意見もあるけれど、よく理解していない人がいる中で基本計画の中でいろいろ格好良いことを書いていてもなかなか実現できないと感じている。
協働のまちづくりをどう理解するかというのは、今日も連合町内会と行政が一緒に雪道対策について協議を行ったが、その中では、高齢者の住宅の雪はねをどうするかと言う議題に挙げていて、それは今行っている小地域ネットワークの中で高齢者の見守り支え合いということで、すでに議論をしている。
そのテーマはすでに別な場で協議しているのに、同じテーマを挙げてどうしますかという話になる。
もう一つは、その中でも、雪はねはやるが報酬は貰えるのかとの話題で、他の雪の多いまちの事例を出してくる。
登別は雪も少なく、やらなければいけないのも年に２～３回程度である。
協働のまちづくりと言うのは、自分たちがやることは自分たちでやりましょうというのが基本的なことで、そういうことを全く理解していない。
もちろん町内会長の中にもそういう人がいる。
基本計画を策定するにあたって、協働のまちづくりと言うものを、もう少しわかってもらうようなことを基本計画に載せる。
そして、基本計画はこういうものだと、基本計画に乗っているということを、協働のまちづくりと言うのは登別市のまちづくりの基本だと理解してもらう。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
計画の本体にはそういったことをしっかりと書いていきたいと思っている。
計画の中の前段の部分である程度触れて、どこで決めたときかれたら、皆で決めて、基本計画で決めているという話をしていかなければいけないと思っている。

⦿部会員
その様にやっていかないと、なかなか皆が理解しない。

⦿部会員

除雪車の仕方が悪いなどと文句を言わず、自分の家の前の雪はねは自分でやればいいと思う。

地区懇談会などでも、大事な地区懇談会の場で除雪の話ばかりしている地区もある。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局

先日の道南連町の大会で、札幌国際大学の先生を招いていたと思いますが、一昨日に訪問し一時間程度話をしてきました。

いろいろと市と絡みながらやっていこうという話をして、市のまちづくりの話や協働の現状などで、アドバイスいただけることがあればして欲しいと話をした。

その中でも除雪の話も出て、札幌では有償で「福祉除雪」と言うものを行っていて、社会福祉協議会が中心となって行って、お金を出すことにしたそうです。

結果としては、今まではボランティアでよかった人が対価を求めるようになり、お金が払うことの弊害があると悩んでいるという話をしていた。

そうしたことからも、どうやったらいいのかという話もあり、単純にはいかないという話であった。

⦿部会員

あともう一つは、市長私案についてなのだが、市長はことある毎に私案には、市民から出た案も色々入っていて、これを基本計画の中にはしっかりと織り込んで実践していくという形を取っていくと公言している。

それを我々のまちづくりの中にどうやって織り込んでいくのか。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局

市長私案について、市長ともよく話をしますが、今回の基本計画の市民検討委員会にしても庁内検討委員会にしても、資料として配付させていただいて目を通していただいている。

資料を踏まえつつ、織り込んでいくものがあるのであれば皆で話をしましょうということで、庁内検討委員会の場でも私案に載っていたがどうするのかいう会話を現にしています。

ただ、市長私案のすべてを計画の中に載せるのは難しい、でも実際にできるものもあり、それは盛りたいという話はしている。

ですから、すべてやるようなお話しをしたことは無いが、そのように伝えら

れていたり、人伝いに話を聞きますとすべてやると認識している方もいるようです。
　すべてやると財政的な余力はないと思います
　まちづくりを考えていく中で、市長も色々なところから話を聞いていて、まず市長が自ら示しながらも、実際にやるかどうかは別であって、その会話の中でそれをきっかけに各地域で論議してもらえればいいというのが大きな目的と捉えています。
　その目的は、結構いろいろなところで物議を醸したのも事実ですが、色々な話をすることができましたので、あれはあれでよかったのかなと思います。

⦿部会員
　連合町内会として色々と議論しているが、やはり夢物語も中にはあるが、それはそれとして残したい。
　基本計画の中にその一部としてというのはある。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　お金がかかりそうなところは難しいなという印象です。
　将来的には、というのはこちらの中にもあるが、お金をかけるとなれば、実際にやったらどうなるか、将来まで電卓を弾きます。
　維持するにはどうする、人を雇わなければいけない、いざ作ったら利用する人がいるのかなどと考えたら、そういう話は昔あったかもしれないけど、現時点では着手できないというのはあってもいいとおもう。
　ただ、どういう風に盛り込むかは難しいところではある。

⦿部会員
　それは市長の意向もあるだろうし、今は結論が出ないだろうが、そういう思いを現状としては入れたい。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　この手法は、まちづくりの論議をするにあたり、今までにないやり方だったので、カンフル剤にはなったかと思う。

⦿部会員
　私はこのようなところです。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局

わかりました。

次に、協働のまちづくりの話で、システムも色々あるかもしれないが、「まちづくり」とは「ひとづくり」ではないかという話を頂きましたが、どうやって行っていけばいいでしょうか。

⦿部会長

議会でも話題になったのでしょうが、自治推進委員会をどういう風にして、ひとづくりを意識しながら、運営していくかと言うことを、どちらかと言えばイメージして話をしたつもりでいる。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局

今日は自治推進委員会の話もしようと思っていました。

一番初めの全体会議の時にも少しお話しさせていただきましたが、今回基本計画を作るにあたって、今までの行政がとっていた、事務局で素案を作りました、大体２、３回会議を開きますので、意見をください、ありがとうございました、という手法ははやめましょう。

いろいろ真剣に論議しながら、お互い理解した中でやっていこうという手法です。

そのなかで基本計画を作り、できあがった後はもう市民検討委員会の方たちは関係ないというのは寂しいと思いますので、できあがった後には市民検討委員会を自治推進委員会にスライドしてほしいと思っています。

基本計画を一緒に話し合いながら作っていって、まちの方向性もある程度定めていった。

その中でこの計画がどうなってきて今後どうなっていくのか、事業もこのように実施していく中で市民ができる部分はどの部分なのか、行政はもっとこうやるべきではないか等の話を自治推進委員会でやっていってほしい。

これは、このまちづくり部会の中でも提言として出していただけないかと思いますので、どうするというのを論議してほしい。

しかしながら、４０人ぐらいの委員さんがいらっしゃいますが、全員に必ずというのは難しいと思いますので、趣旨を理解して賛同してくれる方々が入ってくれればいいと思っています。

⦿部会長

この委員会、部会からの移行にこだわることは構わないと思うが、やはりプラスアルファの人材と言うのは必要だと思う。

それをどうやって見出していくかというのも、どこでどうやっていくのか。
公募してもいいと思うが、もう少し広い視野で人材を発掘する。
元々ある程度のベースがないと、自治推進委員会は条例に則ったものなので、スタートラインにはつかないと思う。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
一度解散した自治推進委員会から最終的に頂いた提言の中でも、今回は公募で行い、様々なことがあって解散したが、次は行政が主体となって、公募は行わないようにとの提言であったし、そう思います。
まず、この市民検討委員会は基礎がもうできている。
その市民検討委員会を基盤として、委員会を組織し、方向性をある程度見出した中で、会としても落ち着いてきたとなれば、公募もいいのかなと思います。
いろいろな人が新しく入ってきても、先輩委員が指導できるようになればいいのかなと思います。
協働のまちづくりを進めるための協働の人材づくりも、そこが起点になります。
自治推進委員会の委員が増えていくことで、協働のまちづくりは徐々に進展するのだろうと思いますし、その周知の仕方や理解してもらう方法も、行政だけではなく市民自治推進委員会で、時には連町にお話をしたり、各種団体と話をしていくべきなのかなと思っています。

⦿部会員
市民自治推進委員会は、まちづくり基本計画のなかで一般公募というのは定義されているのか。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
一般公募とは入っていない。

⦿部会員
テーマによっては、そのテーマに限って公募してもいいと思う。
全く決まった中で行うのはいけないのではないか。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
それはそうだと思います。
限られた人間だけでやるのは批判が起こると思います。

⦿副部会長

市民を育てるという意味で、公募は必要だと思う。

公募で出てくる人は、一定の自覚と言うか思いを持っている。

一定の素材で出来上がったら、公募制は導入していくべきだと思うし、そうしないと、人が育たない。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局

公募してくる人で、本当に思いを持っている人もいれば、言いたいことだけ言えれば良くて、言ったことには責任取らないという人も中にはいます。

色々な人がいるから、基盤は必要だと思います。

自治推進委員会でこういうことをやろう、やっていこうというのは行政も深く絡んで、しっかりとやっていきたいと思いますし、その中で、テーマによっては他の人も入れようというのは有りだと思う。

市民の会議なのにあまり「がんじがらめ」にすると自由がないと思いますので、その時々で話をしながらというスタイルでいいと思っています。

⦿部会員

風通しのいいものにしておかないと駄目で、公募と言う手段はその都度でやるようにする。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局

これまでの部会の中でも、コミュニケーション力がまちづくりに必要となり、その器が自治推進委員会じゃないかと言う話がありました。

⦿部会員

それに尽きると思う。

最終的には市民と議員と行政の三つのコミュニケーションを如何に図れるか。そういうまちづくり会議システムの構築を、市民自治推進委員会が例えばその音頭を取って構築するというのが、最終的な市民自治の目標となるのだと思う。

公募するからには結果を出さないといけない、目標と言うものはあると思うけど、やろうとしていることは三者のコミュニケーションがどうできるか、それに尽きると思う。

手段として会議があると言うのはあるかもしれないが、その三者がまちを動かしていくのは間違いないわけだから、言葉として市民自治とはあるけど、市民が自治なんてできるわけがない。

市民参加型自治活動ならば理解はできるが、市民自治と言う言葉は格好良い

が、そういう言葉ではなく、もう少しハードルを下げた言葉を使うべきであって、改めて市民自治推進委員会を立ち上げるのであれば、そういうアプローチの仕方をしていくのも、必要だと思う。

最初から「市民自治」、「議会で基本条例が制定されました」、「それに基づいて集まって」と言っていたら、構える部分が多分にあったと思う。

団体もそれなりの人を出さなければいけないと身構える部分が多分にあったと思う。

結局コミュニケーション不足に尽きるのだが、どういう趣旨でどういう人を出してほしいのかをお互いが聞けない。

その状態のまま集まって会議を進めていったというところに大きな問題があった。

今後行うのであれば、同じ轍は踏まないようにしてほしい。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局

こちらとしても同じ轍は踏まないようにしていきたい。

本来は、市民ですとか、行政ですとか、そういうのはどうでもいいことで、このまちに住んでいる人が、より住みやすくするためにどうしたらいいのか。

それを色々な人が色々な立場から話をして、できることからやっていこうというテーブルを構築することが役割だと思います。

⦿部会員

そこで議員だからとか、市民が無責任な発言だけしてあとは知らないとなってもいけないし、行政も市民の言うことを聞いていればいいではなくて、普段持っている思いと言うか、そういうことを言ってはいけない立場でずってきているから、それも出せるようなシステムと言うのが、市民自治の最終形の目標だと思う。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局

そこで言い合いになってもいい。

⦿部会員

相手を常に認める、意見を尊重する。

そういう基本理念の下でできればいい。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局

前会の委員会は本質的な話ではなくて、どうでもいい外堀の話ばかりが延々

と続いて、嫌気がさして辞めていく人がたくさんいた。

⦿部会員
　やはり最初のコミュニケーション不足で、行政と市民、条例を作った思いのある人と作成に関わっていない純粋にまちづくりをこれからやっていこうという人、それぞれの立ち位置の方の溝が最後まで埋まらなかった。

⦿部会員
　何かをやりたいという思いが強すぎた。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　急ぐことはないと思う。
　まずは人間関係を構築して、ざっくばらんに話せるようになってから、その中で意見しあえればいいと思う。
　そうじゃないと、行政がやろうと思っていることはこれです。
　皆さん良いですね、それではこの案で実施します、といった従前の手法で諮った方が手っ取り早いです。
　ただその手法は何の意味もないと思うので、今回こういう形でやっています。

⦿部会員
　そういう意味では、自治推進委員会が駄目になったのも、こういう形になったという意味では評価している。
　これをもっと膨らませていけばいい。
　基本計画の中で、協働のまちづくりを推進するためには市民自治推進委員会がいると議論して、まちづくりの発展、その基本をきっちり基本計画にうたって、それでは自治推進委員会はどうするのかというと、検討委員会がそのまま委員になってスタートするというのは、そこまで基本計画に載せることはないだろうけど、それをはっきりうたってやるのはいいかもしれない。
　市民身自治推進委員会は何をやるところなのかというのは、先ほどの意見を網羅して整理した方がいい。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　そう思います。
　次に自治推進委員会を立ち上げたときには、以前の様に、すべてについて市民で考えてくださいというのは行わないつもりでいます。
　ある程度行政で案を出しながら、そのなかで自由度を持って進めていかない

と、ゼロから考えてというのは皆それぞれバラバラなので難しい。
　その中でうまく誘導していくしかないのかなと思っている。
　次に、協働のまちづくりとはどのような登別市を作るかと言うところで、市民が中心にいて行政と一緒に行うのが協働だという話がありました。

⦿副部会長
　これが基本だと思います。
　職員も市民も議会も対等平等であって、そのかわり言いたいことは言う、それが大事だと思う。
　今までは違った印象で、受け身だったのではないか。
　本当に三者が協議したり、意見を言い合ったり。その基本にあるのは、お互いの気持ちや考え方を尊重しながら一致した点で協働していくのが基本だと思う。
　もう一つは、自分が欠席した部会の中で、定住と移住、人口減の関係で、論議した内容を読ませてもらいました。
　ここのところをもう少し深めた方がいいと感じました。
　ここで言うと、定住自立圏の形成、人口の流出の阻止。こういう表現だけでいいのか。
　今登別に住んでいる人が、自分のまちに愛着を持つこと。それは登別の良さ、一般的には自然とか観光と言われている、そういうことを理解してもらう方法は無いのか。
　こういう委員会の中でも参加している人は言うけれど、本当に一般的にそうなっているか。
　日中は室蘭で働いていて夜に帰ってくるのが登別という方が多くて、そういう方々は登別に愛着を持っているかと言ったら、なかなかそうはなっていないように感じる。
　そうすると、地域の町内会活動にもなかなか参加しないし、行政や市民団体が行う行事にも参加しない。
　ここの人たちにどれだれ愛着を持ってもらうか、そういうＰＲと事業に参加してもらう手だてを取るということが、定住の基本だと思う。
　たまたまここに住んだけど、このまちはいいな、好きだなとなるような仕組みづくりと言うのが必要だと思う。
　決して人口を増やすことを目標にしなくてもよいが、少なくとも現状を維持するためには、若い人たちに登別に住宅を作ってもらって住んでもらうことが大事だと思う。

⦿部会員

そういう人は登別市民だけど室蘭の住民で、どれだけ登別に愛着があるかと言えば、無いと思う。

そうすると、そういう人たちにこういう意識が定着しているかどうか。

若草や美園地区と言うのは室蘭から来た人が固まっていて、その人たちが何かをやろうとしても地元の人が受け入れてくれないというものもあるし、逆もある。

どのようにそのあたりを改善するか、古くからの登別市民と言うのは昔から登別市が少しでも良くなってくれればうれしい。

例えば新聞などで登別のことを批判していたら腹が立つ。

室蘭の人はそうは思わない。

批判されて悔しいという思いを持ってもらいたい。

定住と言う意味になるかはわからないが、協働のまちづくりにしても同じで、そういう風にだんだんなっていけば、元々の登別市民と、室蘭から移住してきた人がうまくいくと思う。

移住してきた人が溶け込める登別市を作るのが基本だと思う。

定年退職して移住してきた人がまちの人と交流しているという話もあるけど、それはごく一部のもので、全てがそうなってくれればありがたい。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局

移住の関係では連町会長にもお願いしていることがあります。

移住してきたけど孤立してしまっては寂しいですから、そういう人が来たら、連町や町内会を絡めて受け入れてほしいという話をして、そういった趣旨からも移住パンフに連町会長の言葉を載せています。

それこそ生活の思い入れがないと愛着には結びつかないと思いますし、大人になってから住みだすとなかなか難しい。

でも、例えば子育て世帯が来てくれれば、その子どもは生活の思い出ができる。そういう世代がどうすれば来てくれるかが一番大事なんだろうと感じている。

国で地方創生を盛んに言っていて、国も計画を作ります、道も作ります、市町村も作りなさいという話になっている。

登別市は今まさに基本計画を作っている最中ですので、ここから調整をしながら作っていきます。

今は三本柱で考えていて、一つは子育てがしやすい、登別で子育てをしようと思えるような政策をどうやって打つのか、もう一つが歳を取って安心して暮らせるまちでありたい、最後にこれが肝なのですが、元気な産業があるという

ところです。この三番目が一番難しいのですが、思いとしてはそのあたりに盛り込みながら、やっていこうと思っている。

⦿副部会長

東京げんきかいに入った時に感じたが、そこに来る人たちは登別を離れて２０年だとか３０年経っても入っている。

それは自分の生まれ育ったまちに対する愛情があるからで、地元から離れなければならない人がいても、まちに対する愛着を子供たちに持ってもらえればいい。

このまちに雇用が無いと状況を考えると、子どもたちにも視点を当てることも大事ではないか。

⦿部会員

小中学校を過ごしたまちには、やはりそちらに目が行くのかなと思う。

幼少時代から住めばまちに愛着を持つ。

ところが、途中で来た人はその記憶がないから愛着が持てないというよりも持とうとしない。

そのあたりで文言が一つ入ってくれればと言うのがある。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局

体系図の中では語りきれないので、本文で触れてみたいと思います。

今は幼稚園や保育所の関係でも国で制度を作り直している。

その割にはなかなか進まなくて、地方の自治体は振り回されているのが実情です。

室蘭から登別へ引っ越してもらうのもありがたいが、どうせ子育てするなら登別がいいと言ってもらえるための施策はどうしたらいいのかというところで、例えばネイチャーセンターで行われている合宿に参加して思い出を作ってもらうことや登別でよかったといってもらえる施策をどれだけ細かくできるか。

それはこの章だけでやるとかではないですから、基本計画の中で全体的にどういうふうにやっていくのかというところです。

⦿部会員

それはどちらにせよすべてにあてはまることで、愛着があってUターンしたくても受け入れ先が無くてできないという人もいて、相対的に考えなくてはならない。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　前にこのまちは何を目指すんだ、そこが必要だという話をされたとおもいますが、そこが一番難しいところなのですが。

⦿部会員
　考えてもわからない。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　単純に言えば、いつまでも住んでいられるまち、住みたいまちにするのが究極の目標なのだろうと思っているが。

⦿副部会長
　そのためにはなにをするのか。

⦿部会員
　愛着は強制するものでもないし、作り出せるものでもない。
　個々に感じてもらうものなので、何に対して愛着を感じるのか。
　そこを洗い出していかないと、ただ漠然と言ったってそのままで終わると思う。
　そのためには教育への取組みなのか、住宅の確保なのか、子育てへの支援なのか、老人への福祉なのか。色々あるが愛着へと進む部分は人それぞれだから、これが愛着だと役所が作り出すものではない。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　制度を作ったり条例を作ったりは、まだやり易い。
　心に訴えかけるものを制度にしなければいけないのが一番やり難いことだと思います。
　ですから、市民自治推進委員会などで話し合いながら、またこういう基本計画を作る中でも、愛着を持てるようなという言葉でしか表現できない。
　それを具体的にどうやるのかと言うのは行政だけではできないことで、それが一つの協働だと思う。

⦿部会長
　自治推進委員会で、登別のことを知らない人にクイズ形式で伝えるという取組みをやろうとしたが、途中で頓挫しました。
　あれをやりかけたときに、自分の住んでいるところを知るという意味では一

つのアイデアだと感じました。
　それぞれがアイデアを持ち寄って作り始めて、登別を知るための知恵と言うのを教育委員会にもお願いしたりもした。
　その時の資料は捨てられないでいます。
　それこそ自治推進委員会で、手法はいろいろあるのだろうが、そういうことをやるのも、郷土愛を育む一つの手法だと思う。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　愛着づくり事業の一つとしてありだと思います。
　ただ、あの時も頓挫してしまったのは、かなりのマンパワーが掛かるし、精度も上げていかなければならない。
　作った以上は恥ずかしいものを出すわけにはいかない。
　皆が自分の中でプレッシャーをかけていって、いざ誰がやるとなったら自分はできないとなった。
　そういうところもじっくり考えて、関係団体と話をするのが大切で、つくることが終わりではありませんので、そういうのを考えていくのもいいと思う。

⦿部会長
　子どもも巻き込んだ中で取組み、そういうものを育むやり方というのはあると思う。

⦿副部会長
　我が家は三世代で暮らしていて、高校生と小学校２年生の孫と車で出かける機会があります。
　例えばカルルスに行ったり、鉱山の奥の方に行ったりするのですが、どれだけ登別が自然にあふれていて、いいところがたくさんあるのかというのを教えているつもりです。
　小学校２年生の子に今年、富浦の防空壕の話をしてあげたら、深く頷いていました。
　そういう話をして、自分の住んでいるまちがどんなまちなのかというのをすこしでもわかってもらえればいいと思う。
　学校で使っている、登別の副読本にまだまだ情報を盛り込むことができないかなと思います。

⦿部会員
　登別は室蘭のベットタウンと一般的に言われているが、住めば都で愛着を持

つことになります。
　子どもが出来たりすればさらにそうなりますし、愛着にこだわる必要はないと思う。
　少しでも登別に住んでもらうためには、何か魅力がないといけない。
　魅力を作るためには目玉がないといけないと思う。
　私も室蘭が勤務先で、４０年そういう生活をしてきたが、室蘭の人からは温泉の半額券とか、温泉があるところに住んでいることをうらやましがられたことがあります。
　それは非常に気分が良くて、自分の住んでいるところがよその人から見たらそういうふうに見てもらえているのだと感じました。
　今も色々いいところがあるのだが、更にもう一つ何か目玉が必要で、自然を生かした目玉とか、温泉を生かした目玉とか、そういうものを皆で考えて作り出すのも一つの愛着を持つことにつながると思う。
　そういう意味での検討はあまりされていない。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　目玉を作ろうと思ってはやっていないと思う。
　ネイチャーセンターが行っていることも、目玉と言うよりこういうことがやりたい、必要だという考えだと思う。
　昔から、登別は色々な魅力のあるまちだがなかなか生かされていないと思われるのは、接点がないからそう思う。
　自然に触れ合っている人は何を言っているのだと思っていると思う。

⦿部会長
　地元の人はいつでも行けると思って、そういうところが頭に入っていない。
　だから、親善な気持ちで見て歩くのもいいと思う。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　明日、連町で講演会を行うのですが、その中で市で嘱託員として任用している方が講演をします。
　その方は神戸から来ている方で、登別に住んで実際どう思ったかと言う話をするのですが、そういう人の話を聞くと、登別には本当に色々なものがあって、魅力がある。
　食べ物も市民が普段から食べていて何も思わないものもおいしいと言う。

⦿部会員
　雪が降るのがいいという人もいる。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　そばにいるものは見えなくなる。
　それを再確認するというのは、先ほどのクイズとか、見て歩くツアーもいいと思う。

⦿部会員
　この間「ゆめみーる」をテレビ局が取材して、実際に１６時から１５分ぐらいの時間で活動が放映されました。
　そうしたら、お客さんがどんなところかと見に来て、忙しくなったのですが、その中に札幌から来た８０過ぎのおばあちゃんが、温泉に泊まって「ゆめみーる」に来る目的で、温泉からハイヤーで来ました。
　まちを宣伝するのは難しいが、このような取組みで、自然と人口減の歯止めになるかもしれない。
　テレビを見ただけで紹介された場所がどのようなところかとお客さんが来る。
　宣伝効果と言うか、これも魅力を感じるまちづくりではないか。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　登別は情報発信が不得手な傾向がある。
　行政も民間もそうで、様々なメディアに、来てほしいとか出してほしいとか中々やらない。

⦿部会員
　行政ももう少し伸び伸びと仕事をすればいい。

⦿部会員
　対議会や対市民を考えると、どうしてもそうなってくるのではないか。

⦿部会員
　行政は失敗できない。言ったことの言質を取られて、裁判沙汰になることも最近は多い。
　それがあるからできない。
　だから、先ほども言ったように三者会議が必要だと思う。
　仕事は仕事として割り切ってもらうしかない。

それは役所だけの話ではない。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
失敗したらやめればいいとよく言われるが、そうはならない。
気持ち的にはそう思うが、失敗したら市民の税金を無駄遣いしてと言われる。

⦿部会員
市長は日本一の市役所にすると言っていた。

⦿副部会長
何が日本一なのか。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
何でもいいのだと思う。
このまちで、役所の中で日本一だというものを作りたい。
元気のある職員がいっぱいいるとか、制度として日本一早くやっているとか、なんでもいい。
それは宣伝したいというところです。

⦿部会員
魅力づくりと言うよりも、魅力発見と言う方がいい。
つくるとなると愛着と一緒になってしまうから、そうじゃなくて、すでにあるけど気づいていない、近すぎて見えていない。
この間、民生委員の宿泊研修で帯広に行ったのだが、帯広のある工場に行って何が一番印象に残ったかと言うと、廊下ですれ違う従業員の全員が挨拶する。
それが新鮮な光景に見えてすごいと感じました。
そういうところにも魅力は感じられると思うし、それを如何に発見するかが近道だと思う。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
幌別中学校などはそのような挨拶を励行している。

⦿部会員
学校は多いけど、それは教育の一環として言わされているという先入観もあり、それはそれでいいのだが、そうじゃなくて一民間企業の大人がそういう風になっているということがすごいと思う。

⦿部会員
　海老名市役所もそう。徹底している。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　大体話し終わりましたが、語り残していることはありませんか。
　これを基にして、まちづくり部会の提言案を一度作らせていただきます。
　それで、足りないものがあれば付け足してもらう。
　それと、市民自治推進委員会を作るべきだということを皆さんの思いとして書かせていただきます。

⦿部会員
　前回の部会で話のあった基盤づくりのところで、行政の部分はどのような記載とするのか。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局
　進み続けるというのは無条件に右肩上がりですので、現状とは違うのではないかと言う話があって、そこは担い合うまちづくりと言う表現に切り替えて、公共施設の関係と市有財産を合体させて、一つの形の中で整理しようと思っています。
　今後の各部会ですが、一斉にこういう作業に入っています。
　振り返りを行い、こちらで提言書を作って、皆さんで話をしていく。
　色々意見いただいているのも、体系図の中に落とし込めるものは落とし込んで、それを皆さんに見てもらって、いいということであれば提言の時に付けようと思っている。
　市民と庁内委員会で話し合った結果がこれだと言う整理をしていきたいと思っています。
　ですので、次の部会は提言案をお見せすることになるから、日は空くと思います。
　今日欠席された方も、意見があると思いますので、電話や来られるのあれば来ていただいてお話を聞いて、それも吸い上げて作成します。

⦿事務局
　次回は年明けになりますが、１月２９日（木）に開催したいと思います。
　案内はまた郵送でお送りします。

⦿市庁内部会副部会長兼事務局

それではみなさん良いお年を迎えてください。

⦿部会長

大詰めですので、次回はできるだけ参加していただいて、皆さんで議論を深めていきたいと思います。

今日は終わりにしたいと思います。おつかれさまでした。